



巻頭言

44号

会員の皆様へ

桜水会会員の皆様におかれましては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度、会長代行を務めさせていただきとなりました黒澤(29期卒業)と申します。

橋ヶ迫会長は4年ほど前、大病をし、病氣と付き合いながらも桜水会会長の職務を意欲的に努めてまいりました。しかし、昨年末、残念ながら病状があまり良く無い状況となっていました。今も療養には努めていますが、このまま会長の職務を遂行することが困難となり、私が代行を仰せつかった次第です。

そこで、私と共に田中 英臣(45期)副会長、今川 壮浩(47期)副会長に学部校友会の幹事として就任してもらい、会員相互の親睦の場としての桜水会のさらなる活性化を図って行く所存です。さらには、会員の皆様と学科の先生方のお力をお借りし、在校生への支援などをはじめ海洋生物資源科学科が益々魅力ある学科になるように努めて参ります。

また、以前よりお知らせしています様に、2022年に桜水会は70周年を迎えます。その記念事業を計画していますが、その為の実

行委員会の設置・事業の検討、そして、それだけに留まらず桜水会活動の将来を見据えて会員の皆様のお力添えが是非とも必要です。つきましては桜水会総会・懇親会への積極的なご参加をお願い申し上げますと共に、70周年記念事業実行委員並びに桜水会運営にご参加いただき、次期執行部を担っていただける会員を広く募っています。ご協力いただける方は是非事務局までメール連絡をお願いします。

最後に、橋ヶ迫会長の下で平成26年よりおよそ4年間、私と共に副会長を努め、その後、健康上の理由で桜水会相談役として3年、桜水会を支え、ご活躍頂いていた加部 郁夫氏(19期)が昨年8月に永眠いたしました事を会員の皆様へお知らせいたします。

また生前、加部先輩には大変お世話になりました事を感謝すると共に、ご冥福をお祈りいたします。

(会長代行 黒澤 慶司)

職場便り

横須賀学院中学高等学校 理科教諭

鈴木 眞吾

ー横須賀学院での歩みと繋がりー

大学を卒業し、22年が過ぎました。月並みですが、あっという間でした。紆余曲折はありましたが、現在は、神奈川県内の私立横須賀学院で理科の教員をしております。

大学では魚医学研究室に所属し、広瀬先生や間野先生に大変お世話になりました。そして、現在までその関係を続けさせて頂いております。大学との繋がりが今も存在していることは、私にとってごく自然なことですが、理科の教員を続けていく中で、大きな財産となっております。私は、理科学部の顧問をしておりますが、過去には夏休みの課外活動として、間野先生に『魚類の解剖講座』を受け入れて頂きました。生徒は、日頃の活動として「イカの発光細菌」や「軌道エレベーター」「滑らないタイル」「ニューラルネットワーク」「イネ科植物由来のガラス」など、様々な研究を行っています。そして、学会発表も行っております。今年度は、『高校生バイオサミット in 鶴岡』『高校化学グランドコンテスト』『日本微生物学会微生物アートコンテスト』『ジュニア農芸化学会』『集まれ！理系女子 女子生徒による科学研究発表交流会ー全国大会ー』『電気学会 U-21 学生研究発表会』『TSS (Toyama Science Symposium)』などに参加しました。これら研究の相談も間野先生にはさせて頂い

ております。

また、横須賀学院では年間を通じて『学院セミナーオ』という外部講師の方々を迎え、講演やワークショップを行っております。そこでも、講師として間野先生をお招きし、『～魚もサンゴも病気になります～海や川で病気が増加している理由』というタイトルで講演を行って頂きました。部活動や学校のカリキュラムなど、様々な場面で学生時代と変わらず、優しく相談に乗ってくださる先生方には、毎回励まされております。今後も、この繋がりを大切にしていきたいと思っております。

教員となって、人との縁や繋がりを、以前より強く意識するようになりました。横須賀学院は、キリスト教に基づく学校で小学校から高等学校まであります。昨年度、私は中学一年生から高校三年生まで、六年間持ち上がった中高一貫生を卒業させました。小学校から12年間、横須賀学院で過ごした生徒もいます。私は、地元の公立中学校高校を卒業しているので環境が変わらず、同じメンバーと過ごすことがどのようなことなのか、想像もつきませんでした。そこにはとても強い繋がりと、安心感が存在するのを感じました。6年間変わらず担任をした生徒もいました。6年間は決して短くはありません。生徒や保護者の方々との繋がりを通じ、多くの学びがありました。

私が勤める以前に横須賀学院を卒業し、魚医学研究室に所属した学生とは、研究室を訪ねたとき知り合いました。理科教員の研修会で、初めて出会った研究室の後

輩もいます。神様のご計画でしょうか、縁とは不思議で、大切なものと感じております。この度の投稿が、また新しい繋がりのきっかけになることを期待しております。

(第 46 期)

五洋建設株式会社 土木部門 環境事業部

宮本 達也

私は、2014 年 3 月に杉田教授、糸井准教授の増殖環境学研究室を卒業した、宮本達也と申します。卒業後は、大学院で甲殻類アレルギーの発症機構について 2 年間研究しましたが、学部生で受けた講義から干潟造成工事に携わりたいと思い、海の建設会社である五洋建設(株)に入社しました。

弊社は、広島県呉市で水野組として創業し、2021 年で創業 125 周年を迎えます。臨海部に強みを持つ企業として、海の土木工事を中心に、現在は陸上土木、建築、海外での工事も行っております。

私の場合、入社から 3 年間は宮城県気仙沼市の工事現場に配属。配属された地域は、東日本大震災で高さ 20m を越える大津波が襲来し、近くの河川を津波が 4km 遡上して 50 名以上の命が奪われました。そのため、震災復興事業として県内最大級の防潮堤築造工事が計画され、私は現場監督として、防潮堤完成に向け奮闘する日々を送りました。この 3 年間で工事の作業方法の選定や工程・資材の管理、現場の安全管理など、建設現場の基礎を身に着けることができ、非常に有意義な経験となりました。

入社 4 年目からは本社の環境事業部に

配属となりました。当部署では、工事の環境に関連した技術支援を行っており、入社当初に抱いていた干潟造成工事や浚渫土砂の有効活用等を扱う海域環境グループと、土壌汚染やゴミの埋立て処分場建設等を扱う土壌環境グループがあります。また、当部署には同学科卒の中瀬浩太先輩も在籍されており、てっきり私も海域環境グループに配属かと思いきや、、、蓋を開ければ土壌環境グループに配属でした。道路や橋梁、漁港などの一般的な工事とは異なり、環境関連工事は特殊な案件が多く、土壌環境グループでは、ごみの埋立て最終処分場の拡幅工事、ごみ焼却施設の解体工事、福島第 1 原発事故に付随する環境再生工事等、非常にニッチな分野を扱っております。土質やコンクリート等の土木的な知識から、埋立て廃棄物、放射能、ダイオキシン等の知識、またそれらの関連法規など、工事現場にいた時よりも広い視点で業務にあたることが求められます。また社内の調整も多く工事現場にいた時と比べ勝手が違い過ぎるため、異動当初は別会社に転勤してきた気分でした(笑)人生なかなか思い描いたようには進みませんが、まずは今の部署で自分の専門となる分野を確立できるよう日々精進し、将来は干潟造成工事等、海域環境に関する環境案件にも携われる人物になりたいと思います。

最後になりますが、皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

(第 63 期)

新江ノ島水族館

山本 岳

平成 27 年度に海洋生物資源科学科を卒業しました。学生時代は、海洋環境学研究室に所属し、「相模湾江の島沿岸域におけるクラゲ類の出現動態の季節変遷」というテーマで卒業研究を行い、「クラゲ」について学びました。卒業後は、南知多ビーチランドで 2 年間、海獣類（イルカ）担当として飼育員のいろはを叩き込んで頂きました。その後、現職である新江ノ島水族館に移り、魚類（クラゲ）担当になってから早 2 年が経とうとしております。

前職では、海獣類担当のトレーナーになるまでイルカに対して深く興味を持ったことがなかったため、本当に何もかもわからない状態でのスタートでした。しかし、何も知らないからこそ全てのことが新鮮であり、トレーニングの理論や健康管理（体重測定や採血など）の仕方、水中でのイルカの扱い方など様々な経験をすることができました。また、仕事に慣れてきた頃には、独自で採集したクラゲの展示もしております。

現在、新江ノ島水族館では、クラゲの担当をしていますが、イルカで学んだことがほとんど通用せず、繊細で儂い生き物を飼育しています。しかし、日々の様々な作業を「イルカトレーナーの視点」からも見ることができ、広い視野を持つことの大切さを知りました。

水族館に就職してからというもの、祝日も年末も休むことなく働いています。正直な話、この業界は働く条件がとても良いと

は言えません。自分でも「なぜこんなに大変なのに続けられるのだろう」と思うことがあります。でも、その理由はシンプルで、どうしてもなく「生物が好き」だからです。飼育員は、自分で学んだことを 100% 活用することができる職業です。私は、そんなところにやりがいを感じますし、大好きな生き物のために人生をかけてもいいなと思っています。

今、水族館で働くことを目指している学生の皆様、どうか諦めないで、そのままチャレンジしてみてください。頑張ったその分、あなたのやりたいことができる未来が待っているはず。確かに狭き門ではあるかもしれませんが、目指さないことには、なれるものもなれません。学生のうちにしかできないことが沢山あります。海で、川で、色々な場所で生き物たちと遊んで力をつけておいてください。同じ業界でお会いできることを楽しみにしています。

クラゲの仲間である「カツオノエボシ」に似せた帽子を作ってイベントなどで使っています。皆様、是非お越しください。

（第 65 期）



全国共済水産業協同組合連合会 (JF 共水連)

谷 亮汰

私は 2017 年海洋生物資源科学科を卒業し、JF 共水連に入会致しました。

在学中は、飼育下アカウミガメの内分泌について研究しておりましたが、あまり良い結果を得られなかったため説明は割愛させていただきます。

団体名の通り私達は、漁師の方や水産業を営む方の生命共済及び損害共済商品を扱っております。水産業においては漁業従事者の高齢化や近年の地球温暖化及び乱獲による不漁などにより年々漁獲量が減少しているのが現状です。そのような状況にある漁業者を、私たちは怪我や病気の治療費の支払いや住宅の保証によって支えています。

私は JF 共水連に入会して 3 年目を迎え、現在は生命共済の支払い査定を行う部署に所属しています。保険の請求をされたことがある方ならおわかりかと思いますが、保険や共済の支払い請求をする際には必ず病院でもらう診断書（傷病名や入院・通院期間、どんな手術を行なったかなどが記されている書類）が必要になります。この書類を見て支払額を査定していくのですが、一般的な病気や怪我はもちろんのこと、散見されるのはやはり漁労作業中の怪我です。船上でバランスを崩しての転倒、骨折などをはじめ、漁網や釣り糸の巻き取り機械に手を挟み指を切断するような事例も毎週のように拝見するため、改めて危険が多く伴う職業であることを実感します。

その様にリスクが高い漁業者は、ひと昔前までは他保険や共済では引き受けてもらうことができなかつたようですが、現在では私たちの共済よりも安い掛け金で保険や共済に加入できるようになりました。私たちの共済は、漁業者がお金を出し合い共済事業を始めているため、加入条件は漁協の組合員であることが前提となっています。昨今掛け金の安い保険が増えてきたなかで、それでも私たちの共済を選んでいただいている理由は、漁協に所属する組合員（漁業者）同士が共済に入ることでお互いに助け合いの意識が生まれ、病気や怪我をしたときには近くの顔見知りの漁協職員に相談すれば支払い対象かどうかや請求時の必要書類や記入方法をお伝えできる点にあるのではないかと思います。

水産系を学ぶ者に限らず、水産業は高齢化が進み衰退が著しい産業であることは知られていますが、来年度、国は水産業の予算総額を 3005 億円と決定するなど、水産業の成長産業化に向け支援を行う予定です。水産業が成長産業になることを願い、また、私も JF 共水連の一員として漁業者の方達の生活の保証を担ってまいります。

(第 66 期)

海洋生物資源科学概論の 講義内容紹介

海洋生物資源科学概論(1年次・必修)では、卒業生を講師にお呼びし、講義をお願いしています。講師の先生方の講義の概要を掲載します。

SDGs に向けた長良川漁師の挑戦

長良川漁師 / ゆいのふね代表
平工 顕太郎

著名な絵画の多くには水辺が描かれています。世界各国の主要都市には、街並みに溶け込むように川が流れています。アルノ川(イタリア)、アムステル川(オランダ)、テムズ川(イギリス)、ライン川(ドイツ)、アマゾン川(ブラジル)、黄河(中国)というように川の名前から連想できる風景は誰の脳裏にも存在します。国内においても釧路川、多摩川、相模川、柿田川、仁淀川と聞けばその土地の風土や風景が思い浮かぶことでしょう。

現代における川と人との関係は希薄ですが、かつては水運・物流の拠点として川が私たちの身近に位置していました。例えば、山から切り出した良質な材は、筏に組まれ川によって運ばれました。流域の川湊では、貯木場としての機能や和紙を漉くなど人の息遣いが宿り、商業や経済とも結びつきながら地域固有の川文化が形作られました。日本人は、風土の中で水の恵みを享受しながら様々な産業や伝統、工芸品、さらには芸能に至るまで発達させてきたのです。

私の漁場である岐阜県長良川は、両白山地からの水の恵みであり、流域に86万人の暮らしを抱え、岐阜から名古屋一円の濃尾平野を潤しながら伊勢湾へと注ぎます。私たち岐阜県民は今なお生活の身近に川の水を必要とし、人々の暮らしの中で清流が保たれている地域です。そこに海から遡上する両側回遊の魚が棲息し、特に天然鮎は漁業者によって舟で水揚げされます。私が所属する長良川漁業協同組合には、鮎の漁法が19あり、有名な伝統漁法「鵜飼」はその一つです。岐阜は全国の公設卸売市場として唯一となる天然鮎の「競り台」を保有する町ですので、水揚げされた天然鮎が競りを経た後に全国へと運ばれます。いわば岐阜は日本国内における天然鮎の市場価格を司る地域です。さらに、一般市場に流通する鮎ばかりではありません。宮内庁式部職の鵜匠らによって御料場から水揚げされる鮎は、年に8回、皇室へと献上されています。私は、長良川に現存する御料場の傍らに4艘の舟を所有する流域最年少の川漁師です。生業として河川漁業が成り立つ背景には、この地域で昔から続く持続可能な流域システムの存在があります。そして、この流域システムこそが世界的に珍しく、2015年12月にFAO(国連食糧農業機関)によって「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されました。後世に引き継ぐことを目的とした当該認定を受け、これからの私に求められることは単に現場で汗を流すことだけではありません。この仕事を続けていくために不可欠なことは、対象となる水辺やそこに関わるヒト

の育成です。これらが持続可能でなければ私自身の活動も漁場も現代の社会構造においてはすぐに失われてしまいます。漁業者という立場で地球規模のSDGs（持続可能な開発目標）に向け、力強い一歩を踏み出したところです。

(55 期)



天然アユの競り

横浜冷凍株式会社 海外事業部
樋口 敏久

私は水族生態学研究室(旧・海洋生物資源管理学研究室)に4年次から修士課程まで在籍し、高井先生と中井先生のご指導を賜りました。在学時はメジナとクロメジナの生態について研究しておりました。現在は横浜冷凍株式会社に勤めております。この場をお借りして、簡単に弊社の説明をさせていただきます。

弊社は冷蔵倉庫と食品販売の二つの事業から成り立っております。冷蔵倉庫事業は食品を中心とした冷蔵・冷凍保管を行う、営業冷蔵倉庫です。食品販売事業は主要産地に拠点をもち、水産品・畜産品・農産品を国内外から調達し、多岐に渡る取引先へ販売しております。私は後者の食品販売事業部門の海外事業部という部署に所属しており、海老商材の仕入および販売の担当をしております。

弊社は各担当者が世界の生産地・生産者を選定し、仕入れ・販売までを一元管理するビジネススタイルを確立しております。私が担当している海老商材の主要産地は東南アジアなので、これまでインドやベトナム、インドネシア等様々な国へ出張に行かせて頂きました。その際に常に痛感するのが、語学力と応用力です。品質の良し悪しを判断出来ることは、とても重要なのですが、現地で交渉や提案が出来ないと業務に支障を来してしまいます。

水産業界を目指している方は、専門的な知識の他に、外国の言葉に触れ、様々な経験をされると良いと思います。一緒に働ける日を心待ちにして、海老の販売に注力したいと思います。

(60 期)

水産用医薬品の研究開発
共立製薬株式会社 ワクチン開発部
村上 大雅

間野伸宏先生の研究室を卒業し、現在は水産用医薬品の研究開発に従事している村上大雅と申します。海洋生物資源科学概

論では、会社の紹介、水産用医薬品について、研究・開発の業務についてのお話をさせていただきました。それぞれの概要を紹介いたします。

共立製薬は動物用医薬品等を開発・製造・販売しているメーカーです。「動物」というと多くの種類がありますが、イヌやネコを中心とした一般にペットと言われる【伴侶動物】や、主に我々の食に繋がる【畜水産動物】を対象として、病気の予防や治療、消毒などに用いられる製品を主として取り扱っています。その中で、私は水産用医薬品の研究開発グループに所属しています。

水産用医薬品とは、「水産動物の疾病診断、治療、予防に使用されるもの」と「水産動物の身体の構造又は機能に影響を及ぼすもの」と定義されている、ワクチン、抗菌剤、駆虫剤、消毒剤、ビタミン剤、麻酔剤などに分類されます。共立製薬では、この中で麻酔剤以外の製品を扱っており（2020年2月現在）、私はワクチンを中心に担当しています。

ここで、水産用ワクチンについて紹介いたします。日本国内で使用が認められている水産用ワクチンは、計28製品あり、その中で共立製薬が販売しているのは11製品です（販売していない製品含む、2019年1月現在）。これらの水産用ワクチンは投与方法により注射剤、浸漬剤、経口剤と大きく3つの種類に分類され、それぞれにメリットとデメリットがあります。注射剤の場合には、効果が高く、1尾1尾に確実に投与可能、また投与時に病気や奇形の個

体を選別出来るといったメリットがある一方、作業が大変で人手が必要なこと、麻酔を掛けるため魚への負担も大きく、副作用も生じる可能性があるのがデメリットです。これと比較して、浸漬剤や経口剤の場合には、作業が簡易的であり、魚への負担や安全性が高まりますが、注射に比べると効果が低いことや、投与が不均一になるといったデメリットが挙げられます。なお、講義では、実際に注射ワクチンを投与している動画を放映し、作業性を見ていただいた上で、皆さんだったらどのワクチンを使いたいかわかりやすく考えてもらいました。さて、実際に上記の2019年1月現在販売されている28製品を分類してみると、経口剤が1製品、浸漬剤が3製品（うち2製品は販売していない）、他は全て注射剤です。つまり、作業の簡易性よりも、確実に病気を予防することが主流になっていると言えます。実例として、海面養殖用（ブリ属魚類）のワクチンは、1997年に初めて経口剤、その後2001年に注射剤が承認されていますが、注射剤が発売されて以降はその高い効果からワクチン使用率が一気に高まり、それに伴って対象疾病の診断件数が大きく減少しています。現在では、抗生剤の使用量を制限するためにも、ブリ属魚類におけるワクチン普及率はほぼ100%とされています。

最後に、業務について少しだけ紹介いたします。医薬品を製造販売するためには国の許可（承認）が必要で、動物用医薬品の場合は農林水産省に承認を得ます。我々の仕事は、まず製品の種となる基礎研究、そ

こから製品化を目指す開発業務、そこで得られたデータをまとめて農林水産省へ申請し、審査のやり取りを経て承認を目指す、この基礎研究～承認取得までの一連の業務を全て担当します。最短でも、基礎研究で1年間、開発のデータ取得でさらに1年間、取りまとめたデータを申請してから承認の取得までは、審査期間として2年間を要するため、1製剤の承認を取得するまで早くても3～4年は掛かります。このように1つの仕事を完成させるまで長い時間を要しますし、膨大なデータをまとめる申請書類の作成は非常に大変な作業ですが、とてもやりがいがあり、自身で開発した製品を養殖場で使用していただいているのを見たときには何よりも大きな喜びを感じられます。

日本で初めて水産用ワクチンが承認されたのは1980年代後半ですから、30年程度と歴史の浅い業界です。今現在、ワクチンで予防できる疾病はごく一部であり、まだまだ対策が必要な魚病がたくさんあります。これらの魚病による被害をひとつでも減らしていくことが養殖の更なる発展には欠かせません。私は本学科の卒業生として、ここに貢献出来ていることを誇りに思い、今後も努めていく所存です。

末筆ではございますが、この度はこのような紹介の機会をいただきましたこと、お礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(60期)

MSR 卒業生が覗いてみた社会 ～環境コンサル会社編～

三洋テクノマリン株式会社

小野 ゆかり

海洋生物資源科学科の1年生を対象に、職業紹介に重点を置いて以下の講義を実施した。

はじめに、研究を続けたいという思いから大学院へ進学したこと、大学院生活における良かったことと辛かったことについて話し、大学院在学中の就職活動では、専門にとらわれず幅広い職種に目を向けた結果、現在の職業にたどり着いたことを説明した。

続いて、会社の概要を説明し、業務内容を知らない学生でもイメージが掴めるよう、実際の業務の一例を紹介した。その中では、必要とされる資格や、仕事のやりがいについても触れた。また、ネットでは紹介されていない、社員の生の意見から、社内の雰囲気はどのようなものであるかを紹介した。

その次には、環境コンサルの仕事において技術士の取得が必要とされるということや、海外に出たときのアピールポイントとなることから、JABEE コースを受講することのメリットについて説明した。この話題を学生に身近に感じてもらえるよう、学生の時のJABEE コースのイメージも併せて話した。

最後に、学生時代に何事も全力で取り組んで楽しむことを後輩へのメッセージとした。

(64期)

水産分野の国際協力

一般社団法人マリノフォーラム 21

辻 あずみ

私からは、水産分野の国際協力として、青年海外協力隊の活動やマリノフォーラム 21 の業務について以下のように紹介させていただきました。

青年海外協力隊では、2年間アフリカのガボン共和国という国で、州の水産支局に配属され、養殖ステーションでティラピアやナマズの養殖に関する活動を行いました。ガボンは1人当たりの水産物消費量が多く、水産物は重要な栄養源である一方で、年間総漁獲量が少なく、冷凍魚や缶詰を輸入しているという背景があったので、配属先の人と「まずはどのように養殖ステーションの生産量を増やすか、その後はどのようにその技術を移転していくか」ということを考えながら、それぞれアイデアを出しあったことは、私自身の勉強にもなり、とても良い経験になりました。この協力隊は、国際協力の初めの1歩として大変おすすすめです。

帰国後は、マリノフォーラム 21 で、海外水産業協力に関する調査・研究及び情報の収集・発信等、また海外水産業協力事業の企画・運営に関する業務を行っています。私が携わった業務に言い換えますと、①水産外交上重要な国の水産分野に関する基礎情報収集・個別課題の抽出、②東南アジア漁業開発センター職員を対象とした研修の計画、③JICA が実施している（水産分野の）本邦研修の計画、などを行っています。現在は、特に③に携わることが多い

ので、各国で活用できそうな日本の事例を紹介できるように、また親日家になってもらうことで今後のプロジェクトが円滑に進むようにということを念頭に置きながら仕事をしています。

現在、いくつかの大学では JICA の大学連携ボランティア（大学の専門性と教員・学生などのリソースを活用して、開発途上国の課題を解決しようとする取り組み）として中南米のコロンビア・セントルシアで水産分野の持続可能な開発に関する活動を行っています。今後は、日本大学からも水産分野の国際協力に興味を持つ人が増えてくれるように、私もこのような講義の場を大切にしながら、日々精進したいと思います。

(64 期)

研究室便り

海洋生物生理学研究室

卒業生の皆様におかれましては、健やかに過ごしのことと存じます。2019年度も多くのOB、OGたちが研究室を訪れ、元気な顔を見せてくれました。感謝いたします。

令和へと改元されると同時に、朝比奈先生が特任教授となり、私（鈴木）が海洋生物生理学研究室の運営を引き継ぎ、澤山英太郎専任講師が着任して、新たな体制でのスタートを切りました。朝比奈先生は肩の荷が降りたのか、幾分リラックスした様子で過ごされていますが、学生にステロイドホルモン測定や組織学の指導をしたり、研究の助言をしたりしてくれています。澤山先生は本研究室の出身ですが、梓を飛び出して魚類の遺伝育種の世界に飛び込み、東京海洋大学で修士号を取得した後、瀬戸内海にある水産会社で研究部門を一人で担いながら、愛媛大学で博士号を取得した、という異色の経歴の持ち主です。今年1年間教員を経験してみて、色々な面で大変さを実感している様子ですが、学生をよく指導してくれています。遺伝育種の分野で活躍してきた澤山先生が、研究室にも学科にも新しい風を吹き込んでくれると期待しています。

今年度の研究室の大きな出来事として、2名の学生が博士後期課程に進んだことが挙げられます。喜納泰斗君は板鰓類の繁殖機構を調べています。かなりの実験好きとみえて、多彩な手法を駆使して実験しま

くり、あちこちで学会発表をしています。喜納君の実験の手を止め、論文を書かせるのが目下の大きな課題です。鈴木亮彦君はイルカの腸内細菌について研究しています。鈴木君は実験を計画的に実施し、論文をすでに複数公表しており、日本学術振興会の特別研究員（DC2）にも採択されました。キャラクターの異なるふたりですが、いずれもよい研究を展開できるようにサポートしたいと思います。博士前期課程にも現在2名の学生（斉藤孝幸君、塚本玄君）が在籍しており、来年度も新たに2名が進学する予定です。今年度、学部生は20名が在籍し、複数種のイルカ、ペンギン、アカエイ、クギベラ、マダイ、ニジマス、ウミウシ...といつものように色々な動物種を対象に、多様な切り口で研究を行いました。大学院生たちが面倒をよく見てくれたこともあり、何とか全員が研究を進めることができました。今年度は私が昇格と同時に主任に任命されるという緊急事態に陥ったため、心身ともにかなりの負荷がかかったのですが、先生方も大学院生も皆がサポートしてくれて、学部生も彼らなりに頑張り、全員の力で研究室を盛り立てくれました。

新しい体制への移行に伴い、研究室内の模様替えもしています。朝比奈先生の秘蔵の品々や、さらに先代の先生方の置き土産などが続々と出てきたりして、研究室の歴史と重みを感じながら、一箇所ずつ組み直しています。学生たちも我々も、のびのびと、かつ、しっかりと研究できる環境を作っていきたいと考えています。卒業生の皆

さまも、機会がありましたら新しい体制の研究室を見にきてくれたら嬉しいです。

(鈴木)

海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

令和元年度の本研究室の構成は、荒 功一教授、小糸智子専任講師、廣海十朗特任教授の教員3名、4年次学生10名でした。

廣海十朗先生は、一昨年度ご定年を迎えられ、昨年度より特任教授として授業、演習などをご担当いただいております。

荒教授は、2000年12月より継続して19年目となる『相模湾における沿岸生態系動態の解明(プロジェクト“SHONAM”)』を学部4年次学生6名とともに実施しており、同海域の物理・化学環境特性や各種プランクトン群集(一次生産、ピコ～メソサイズの全ての生物群)の生産性と栄養動態などを精力的に調査(相模湾定期観測第423～446回目を実施)しています。2019年は黒潮系沖合水が相模湾内へ断続的に進入し、また近年進行している貧栄養化などの影響により相模湾沿岸域での栄養塩環境と低次生態系が変化しつつある現況を捉えています。荒教授は、これまでどおり学術3誌の編集委員の他、今年度より「相模川流域下水道左岸処理場処理水の海域放流影響調査検討委員会」ならびに「(駿河湾)サクラエビ再生のための専門家による研究会」の委員を務める傍ら、講演などでもできる限り引き受けており、多忙な日々を送っています。昨(令和元)年12月に不慮

の事故により荒 紗也佳(長女、中学1年生)が突然亡くなった際には、数多くの当研究室卒業生より弔問、通夜・葬儀への参列、ならびに御香料・献花・弔電などのお心遣いを賜りました。ここに紙面をお借りして衷心より感謝申し上げます。

小糸専任講師は年始に新青丸/ハイパードルフィンの航海で相模湾初島沖と伊豆小笠原明神海丘へ調査に行きました。打ち合わせの時点で、冬は海況が悪いから小笠原には行けないというムードが漂っており、投げやりな気持ちで荷役をやっていると、早速出航時間を早めるとの連絡が。海況が悪くて、近場の相模湾初島沖の調査すら実施できるか怪しいとのこと。なんとか翌日、潜航調査にこぎつけたものの、さっさと熱海沖へ避難し、翌日一日待機が決定。船上では、調査がなくてもサンプル処理があるので慌ただしく時間が過ぎてゆきます。初日からこの調子では、小笠原なんて夢のまた夢、と思いつつ数年ぶりに相模湾サンプルをじっくり眺めて暮らしました。避泊中も何度も天候と海況を確認し、最終的に首席の英断で小笠原海域を目指すことに。途中で引き返す可能性もある、という船長の言葉どおり船は激しく動揺し、机上の物が全て滑り落ちるという憂き目に遭いました。こんな様子では目的地に着くまいと高をくくって就寝し、朝起きたら測点に到着しており、驚くほど通常どおりの調査が実施できました。ところが、帰路も激しく動揺したので、小笠原で採集したサンプル処理をするのが非常に億劫でした。今回の乗船研究者はベテラン揃いで、

何度も一緒に乗船した間柄なので、船の動揺もなんのその、阿吽の呼吸に近い感覚で調査をスムーズに進められました。何はともあれ、研究者の思いに応えたいという、船長とハイパードルフィン運航長の気持ちには感謝しかありません。

今年度の本学科海洋生物資源応用コース（JABEE 対応コース）の技術者教育の一環である特別講義（3年次、前期）では、7月3日（水）に市橋 理氏（第37期、アジア航測（株））が『環境コンサルタントの仕事 ～自然と震災～』、7月10日（水）に宮下一明氏（第38期、（株）東京久栄）が『環境アセスメント業務における技術士の役割』という標題で講義しました。

研究室 OB・OG の皆様には、様々な学部・学科のイベントにご協力頂いており、心より感謝申し上げます。また、時折研究室にお立ち寄りくださり、近況をご報告くださってどうもありがとうございます。社会でご活躍されているお話しを伺うのはとても楽しく、励みにもなります。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

令和2年度の研究室は、上記の教員3名、博士前期課程1年次1名、4年次学生10名となります。

卒業生の皆様が湘南（藤沢）キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、海洋環境学研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

（荒・小糸）

増殖環境学研究室

本年度は、研究室の構成に大きな変化がありました。長年、糸井准教授と二人三脚で研究室を運営してきましたが、4月に東京大学大学院を修了された周防玲助手が着任されました。先生は、海洋天然物有機化学を専門とする才媛であり、人柄もおおらかで、研究にたいへん意欲的なことから、着任されるや研究室の雰囲気が一気に明るくなりました。また、2年間空席となっていた研究室の教授に来年度から糸井先生が昇格することが決定しました。先生は、学内で優れた研究成果を挙げた研究者に贈られる日本大学リサーチャー・アワードを本年度に受賞されるなど、いま学部でもっとも注目される研究を推進するひとりです。お二人の先生には、学部・学科の将来を担っていただくこととなりますので、前任の教授としてたいへん頼もしく感じております。

ということで、本年度の研究室は教員3名のほか、大学院生2名、4年次学生24名から構成されております。幸い採用状況が好調なこともあり、就職希望の4年次学生全員の就職先が決定しております。昨今、我が国の終身雇用制も徐々に崩壊しつつあり、若者を取り巻く就労環境は急激に変化しております。彼らが無事荒波を乗り切り、納得のいく人生を送れるよう祈念しております。

令和元年度の研究室の研究成果は、著書1冊、論文6編および国際会議を含む学会発表12報などでした。主には糸井先生によるフグ毒テトロドトキシンを中心とし

た化学生態学や魚類の分子分類学などが中心ですが、海洋シアノバクテリアからの新規化合物の分離に関する周防先生の成果も含まれています。杉田は、2名の卒業研究を指導するほか、未発表の研究データをマイペースでまとめているところです。例えば、私たちの研究室では、出口先生が水質学・環境学、杉田が微生物学、そして糸井先生が分子生物学をおもな方法論として増養殖環境や腸内細菌、フグ毒保有海洋生物などについて研究を進めてまいりましたが、本年度から天然物有機化学の周防先生が加わり、水圏生物や増養殖環境における諸現象の解明から物質レベルでの解析やその応用へと変遷してまいりました。このような変化も近代生物学の流れを反映したものです。糸井先生、周防先生の研究が今後、ますます発展することを期待しております。

一昨年から始めた研究室の断捨離(物品整理)も一段落し、今年はずこし研究に注力することができました。11月には埼玉大学で開催された日本比較内分泌学会のシンポジウムでこれまでの魚類腸内細菌研究の成果について講演し、さらに近畿大学で開催された日本水産増殖学会第18回大会ではプロバイオティクスの研究発表を行いました。何年かぶりに学会の演壇に立ち、久しぶりの緊張感を味わうことができました。

最後に、次号の会報から研究室だよりの執筆者が代わります。長い間、お付き合いありがとうございました。また、私は残り最長3年間は研究室に在籍するつもりで

すので、卒業生の皆様には、お近くにお越しの折はぜひ研究室にお立ち寄りください。

(杉田)

海洋生物資源利用学研究室

令和元年度の研究室所属学生・研究員は大学院博士後期課程2年次1名、大学院博士前期課程2年次1名・1年次1名、4年次学生22名、研究員(博士)1名でした。本年度は博士課程の修了年次を迎える学生が前期1名のみでしたので、比較的余裕をもって発表・修論作成を終えることができました。また、4年次学生も全員卒業研究発表を終え、新たな進路に向かう準備が出来ました。令和2年度は大学院博士後期3年次1名、前期2年次1名、1年次1名、4年次学生は19名でスタート予定です。4年次学生の内2名は1年間休学して、それぞれカナダおよびオーストラリア留学からの帰国者です。留学経験を演習(特に英語関連)・卒業研究に反映させて、他の4年次学生に良い意味での刺激を与えてもらえればと期待しております。新4年次学生は、研究室所属学生を対象とした海洋生物資源科学実習Iで研究室の卒業研究テーマで実施している食品加工技術、食品の理化学的測定・物性測定、酵素活性測定、タンパク質の分離・分析技術、ならびに遺伝子増幅・解析技術を学習しております。そこで、新4年次学生は現4年次学生の卒業研究発表会に参加した後、各自の研究予

定テーマを決定し、現在は卒業予定の現4年次と引き継ぎ実験を実施しております。現4年次学生も卒業研究論文の修正をほぼ終えた状況です。

研究内容に関しては、福島先生の研究テーマに関連する機器も充実してきましたので、先生の専門である水産食品の加工・貯蔵に関する基礎・応用研究のテーマが増えました。本年度、福島先生はイカ・貝類パラミオンに関する研究、乳化すり身のユニバーサルデザインフードへの利用、すり身の戻り反応とプロテアーゼに関する研究、各種処理によるイクラの品質変化、マサバ冷凍・冷蔵貯蔵と筋肉タンパク質・組織構造に関する研究などのテーマで卒業研究指導を実施しました。松宮はキチン関連酵素のキチナーゼとキチンデアセチラーゼ、海洋生物の難分解性多糖分解酵素の分布と遺伝子解析、大腸菌やブレヴィバチルスを用いたキチナーゼの異種宿主発現など、生化学・分子生物学的手法の卒業研究指導を主に実施しました。なお、昨年度はリアルタイムPCRを導入しましたが、今年度から大学院生は次世代シーケンスの手法も取り入れました。

また、4年次学生を対象に食品加工実習（4年次、海洋生物資源科学実習 II）も継続して実施しております。今年もサバ水煮缶詰、ポークソーセージ、ミカン缶詰の製造、かまぼこ板付け体験、工場見学（3年次・4年次合同ビール工場見学）を実施しました。最先端の生化学・分子生物学的

手法のみならず、従来からの食品加工技術習得も食品企業で活躍する人材育成の上から重要と考え、継続して実施しております。

松宮は平成29年度より学部の企画広報担当、令和元年度より就職指導担当および生命科学研究所長を継続して拝命しているため、担当室と研究室を行き来する日々が続いております。また、本年度8月には松宮が大会運営委員長で第33回日本キチン・キトサン学会大会を生物資源科学部で無事開催することが出来ました。これらは何れも、福島先生、学科の先生方並びに研究室所属の皆さんのご理解とご協力のおかげと、深く感謝しております。

（松宮）

魚群行動計測学研究室

本年度は学部4年生24名、大学院博士前期課程1年2名および教員2名で研究室運営を行いました。学生は卒業研究を行うために北海道標津、同洞爺湖、下田臨海実験所および学部の実験室などで鋭意研究に取り組みました。2月4日の卒業研究発表会で全員が口頭発表を終え、翌週10日に開催された、卒業研究コンペ（塚本賞）では、当研究室から選出された、安田、小島の両君が、1位2位を受賞することが出来ました。弛まぬ努力が評価された結果かと思えます。晴れて受賞した両君だけでなく、学生達は皆、卒業研究に真剣に取り組んで来ました。

学生の就職は今年度も好調で、全学生が

就職内定を得ることが出来ました。就職先は水産関係や食品関係およびコンサルタント関係の他、海上保安庁および高等学校教諭など多岐に渡っています。現在新型コロナウイルス蔓延で、国内ばかりでなく世界が沈んだ空気となっていますが、新たな環境に飛び立つ4月からは、それぞれの職場で各人が活躍されて、停滞した空気を打ち破ってくれることを期待しております。

例年同様、5月に鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸による6泊7日の乗船実習と種子島寄港、12月には北海道大学水産学部練習船おしよろ丸による函館までの5泊6日の乗船実習、さらに10月下旬には、社団法人グローバル人材育成推進機構所属の帆船「みらいへ」での小笠原父島までの6日間の乗船実習も実施しました。この他、8月には本学下田臨海実験所でのマグロ延縄操業を始めとした学生実験にも、研究室の多くの学生が補助学生として参加しました。研究室を飛び出して大海原に出ることで、自然の厳しさと海の不思議に触れ、仲間とも絆を深めることが出来たことと思います。

前述しましたように、世の中は大変な時期を迎えており、社会に飛び出す学生達は不安な思いもあるかと思えます。本学で学んだ4年間で得た様々な知識や経験を糧に、困難に立ち向かい、立派に成長していかれることを、教員一同期待しています。会員各位におかれましても、引き続き彼らに対して温かいご指導ご鞭撻を賜れますよう、お願い申し上げます。終わりに、本年も数多くの卒業生より物心

両面で様々なご厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。（小島）

水族生態学研究室

令和元年度の所属学生は、大学院生1名、学部4年生18名、学部3年生22名、および留学生1名の合計42名でした。留学生のキウ・イユン（Chiu I-Yun）さんは台湾の台北市にある国立台湾大学の学生であり、2019年9月から2020年9月まで1年間在籍する予定で来日しました。台湾大学は日本統治時代に帝国大学として設立された名門大学であり、現在まで数多くの優秀な人材を輩出しています。キウさんには本研究室を足がかりにして多くのことを学んでもらい、日台友好の架け橋になってもらいたいと願っております。

本年度における研究室の新規テーマとしましては、クサフグとオオツノヒラムシの食物連鎖関係についての研究と、アオウミガメの摂餌生態についての研究を立ち上げました。クサフグとオオツノヒラムシの研究は、増殖環境学研究室の糸井先生が成果を上げておられるフグ毒の研究プロジェクトの一環です。糸井先生が獲得しておられる科研費から資金をご提供頂きまして、クサフグがフグ毒を獲得する食物連鎖系統を安定同位体比分析により調べました。その結果、興味深い知見を得ることができましたので、このテーマは次年度も継続して進めていきたいと考えております。

アオウミガメの研究は、八重山諸島の石垣島にある西海区水産研究所亜熱帯研究

センターの共同研究者に分析試料をご提供頂く形で実施しました。もっとも、本研究を希望した学生には、単に提供された試料の分析に従事してもらっただけでなく、八重山海域での学外実習活動に参加してもらいました。石垣島から 15km ほど離れた黒島という島には、日本ウミガメ協議会の附属研究施設があります。この施設にインターンシップ生として 2 名の学生を受け入れて頂き、様々な現地活動を体験させて頂きました。私が学生時代に所属していた研究室はウミガメ類を主要対象とする研究室でしたので、今回の研究テーマや学外実習活動も、その縁で導入させて頂きました。本学科にはウミガメ類に興味を持つ学生も毎年入学してきますので、今後も、そうした学生のニーズに応えていきたいと考えております。

これらの新規テーマ以外では、メジナ、ムツ、アユ、ハゼ類、サメ類、中深層性深海魚など、研究室として従来から焦点を当ててきた生物が、本年度も卒業研究や大学院研究の対象となっておりました。本年度の 4 年生も熱意を持って卒業研究に取り組んでくれましたので、こうした主要対象生物についても多くの興味深い研究成果が得られました。次年度も、こうした生物に関する研究を深め、成果を積み重ねていきたいと思っております。

最後になりますが、本年度も釣りやフィールド活動が大好きな人が多く、研究室の雰囲気は一年間を通して賑やかで良かったです。自然災害や疫病に苦しめられたのは難点でしたが、研究室活動中のケガや病気、

自動車の事故、お酒のトラブルなどが何も起きなかったのは誠に幸いでした。来年度も大過なく過ごせることを願っております。変わらずご支援頂けますよう、謹んでお願い申し上げます。

(高井)

本年度、私が指導を担当した学生は、4 年生 6 名、3 年生 4 名の合計 10 名でした。4 年生は女性 1 名、男性 5 名で、とても仲が良く研究室内が賑やかな 1 年でした。彼らが卒業した直後の春先は、研究室内が静かで少し寂しいと感じるでしょう。

本年度は 4 年生の卒業研究として、ペットショップの水槽に混入する外来種の淡水巻貝について日本国内の実態調査を行いました。卒業研究の調査として全国のペットショップを巡り、店員の方に事情を説明のうえ水槽内の巻貝を分けていただくという調査内容です。水産業界には桜水会会員が数多くおられ、調査訪問した先で本学科の卒業生に巡り合う機会も多かったようです。ご協力いただいた卒業生の方には、大変感謝いたします。この研究は本年（2020 年）も続けておりますので、調査で訪れた本研究室の学生をもしも見かけましたら、ぜひお声がけ下さい。また、ペットショップの巻貝や巻貝を運ぶ水草について、何か情報をお持ちの方がいらっしゃいましたらご協力いただけますと幸いです。本年度も卒業生から連絡をいただき、巻貝の卵を入手しました。調査現場におられる卒業生のご協力は得難く、大変貴重な情報とサンプルとなりました。

また、干潟の海産巻貝のウミニナ類とアマモ場、貝形虫の研究も継続しております。アマモ場の海草のデータ、相模湾周辺のウミニナ類のデータなど、過去の卒業研究のほとんどの結果を現在も頻繁に活用させていただいております。皆さまの卒業論文を見返す度に、後輩のため丁寧にデータを取り纏め残してくださっていることを実感しています。2019年の動物分類学会では小沢先生がアマモ場の貝形虫について発表し、石井君、金子さん、佐藤君、松元君が共同研究者になっています。2019年のベントス学会では文理学部の中尾先生が浅野さんとの共同研究である多摩川河口干潟の貝形虫の研究発表を、2020年の日本生態学会では私が吉田君、天海君を連名に東北被災干潟のウミニナの研究発表を行いました。

また、卒業生の中には、これから就職活動が本格的にはじまる現3年生に対し、職場の様子などをお伝え下さるなど、OBならではの親身なご対応・ご指導を下さった方々もいらっしゃいます。同じ大学、同じ学科、同じ研究室（場合によっては同じ研究テーマ）にいた卒業生が、卒業後にどのような仕事に就いているのか、実際の仕事内容や職場の雰囲気はどうなのか、とても気になるところです。就職活動を進める上で大変参考になります。お忙しいなか後輩のご指導をいただき、ありがとうございます。今後も、ぜひ研究室にお立ち寄りいただき、近況や仕事のお話しをお聞かせ下さい。お待ちしております。

(中井)



4年生の卒論発表会を終えて（2月4日）。一週間後に開催された塚本賞コンペティションでは、昨年度の増田健吾君に続き、吉田頌君が第3位の表彰を受けました。いとめでたし。

生物機能化学研究室

小さなオタマで大きな夢

メールボックスを開くと私の目に一つの文章が飛び込んできた。

Dear Mori. We're delighted to accept your manuscript, "Predation threats for a 24-hour period activated the extension of axons in the brains of Xenopus tadpoles"

やっとひとつ終わった。苦しみ抜いた研究なので、あの雑誌、次はこの雑誌と投稿しては棄却されて、最後にある雑誌に受理されたのだ。そのうちインターネットを通して世界中の誰もが青春をつぎ込んだ私のこの論文を読むことができるようになる。

私は何年間この研究を行ってきたのだろうか？オタマジヤクシがいる水槽にサンショウウオ幼生を入れて24時間もすると彼らの脳内に大量の筋肉関連遺伝子が発現してくることを見つけてから。私がオタマジヤクシの脳を取り出したのだから自信を持って言える。筋肉なんて入っていない！脳以外は間違っても入れていないと。多分、10年の月日は流れたと思う。幼年期に両親から“遊んでばかりいると、お前の脳味噌は筋肉になってしまうぞ！”と言われた記憶は未だに残っている。あれは本当だったんだ！なぜ、脳内で筋肉に関連する遺伝子がこんなに沢山発現してくるのだろうか？これがこの研究のスタートであった。

全ての生き物は自分が生き残るために最大の工夫を凝らす。環境が変化すれば、それに適応するために自分の形をも柔軟に変える、これを表現系の可塑性と云う。私はこの表現系の可塑性の中でも捕食者誘導による表現系の可塑性と云う現象に取り憑かれて15、6年になる。

生き物は長い時間をかけて自分を食べようとする捕食者に立ち向かって来た。ある者は色を変え、ある者は棘の皮を纏い、またある者は自らの体に毒を含んで。私は北海道に生息するエゾアカガエルのオタマジヤクシやアフリカに生息するアフリカツメガエル、ネツタイツメガエルを自分の実験材料に用いている。エゾアカガエルのオタマジヤクシはかなりユニークだ。彼らはエゾサンショウウオの幼生やヤゴが生息する池や沼池に生息し、エゾサンショウウオには身体を膨満型にし、ヤゴに対しては尾部を長く、そして尾を高くして被捕食率を下げる。なぜ、彼等はこんな形態を取るのだろうか？エゾサンショウウオの幼生はエゾアカガエルのオタマジヤクシを丸呑みにする。また、ヤゴは素早くオタマジヤクシを捕捉し、肉を噛みちぎるようにして食べる。そのため、エゾサンショウウオの幼生に対しては彼等の口よりもオタマジヤクシが大きく膨らみ事無きを得る。一方、ヤゴに対しては咄嗟の対応ができるように尾部を発達させ遊泳能力の向上を図る。それでは、アフリカに生息するアフリカツメガエルのオタマジヤクシに北海道に生息するエゾサンショウウオなどを暴露すると、どうなるのであろうか？

類似の捕食者には出会ったことが有るかもしれないが、エゾアカガエルのオタマジャクシのように膨満化するのだろうか？この実験の本当の意味は環境が変わり、見慣れない捕食者に出会う事は生物史の中でもよく有ることであろう、そしてそれは生物進化の適応戦略の初期応答を見ることを意味する。また、実験動物として良く知られたアフリカツメガエル (*Xenopus laevis*) は全ゲノム解析が終了しているので、遺伝子のレベルからも解析することが可能となりサンプルとして魅力的である。

さて、日本のサンショウウオを添加されたアフリカツメガエルのオタマジャクシは尾部の筋肉を伸長させ、そして 24 時間後には脳内に大量の筋肉関連遺伝子を発現させていた。10 日間もサンショウウオに晒されていたオタマジャクシの脳内では酸素欠乏の時に発現してくる Hif 遺伝子が大量に発現していた。オタマジャクシも 10 日間にも渡る恐怖ストレスで酸欠になるのだろう。大量の情報を処理する脳は常に酸素が必要である。私も若い頃、上司に連れられて説教酒を味わったことがある。大して呑んでもいないのにタクシーを降りてからの記憶があまり無い。翌日、家の前から道路まで吐瀉物が点在し、昨日の無念を物語っていた。ストレスにより血管は収縮し、アルコール代謝も満足に出来ず血中アルデヒドが増加したのだろう。我々人間も彼らと同じなのである。

最近のゲノム解析によりこの *Xenopus* は人間の病気の遺伝子を約 8 割も持つことが判っている。つまり、彼らを見ている

と自分が見えるのである。

さて、話を続けよう。この 24 時間に彼らは脳内の多くのシグナル伝達 (何十もの遺伝子が関連して動く生理現象) を一気に変えたのだ、そしてアクチンサイトスケルトンシグナリングと云うシグナル伝達を活性化させ、神経軸索のアクチンと云う筋肉関連タンパク質を螺旋状に巻きつけ神経軸索を伸ばしているのでは？と云うことが推測できた。この仮説を証明するためにアフリカツメガエルのオタマジャクシの鼻孔に神経を染色する色素を入れた。すると、サンショウウオと一緒に 24 時間飼育したオタマジャクシは鼻孔から脳のホルモンを分泌する器官の近くまで神経軸索を伸ばしていたのだ。神経軸索を伸ばすためにアクチンなどの筋肉関連遺伝子が大量に発現していた事が判った。他にも彼らはこの 24 時間で CREB シグナリングを活性化し記憶や認知機能を向上させている事が推測できた。オタマもなかなかやるものである。彼らはこの捕食者適応のために人間では全く制御できない病気の遺伝子もコントロールして生き残りを図っている事が判ってきた。つまり、この小さなオタマは進化生物学のモデルのみならず人の病気のモデルになる可能性もあることを示すのだ。こんな話をすると人は笑うが、ブレークスルーは思いも寄らないところに有り、それに気が付く者のみが新たな道を開くのだ。

(森)

水圏生物病理学研究室

令和元年度の水圏生物病理学研究室は、学部生14名（内1名は東海大学学生）、博士課程1年の森さん、修士課程1年の伴野君、小原君、安田君、研究員の難波博士（日本大学非常勤講師）、石川博士（栃木県水産試験場）、教員間野の計20名体制でした。就職状況は本年度も良好で、今年も水族館が最も多く5名、次いで飼料会社3名、食品会社1名、検査会社1名でした。大学院への進学者も3名おり、2名は本学、1名は琉球大学に進学予定です。

研究活動としましては、今年も養殖場、水族館および河川で認められる魚病研究に取り組みました。養殖関係ではニジマスの伝染性造血器壊死症（IHNと呼ばれるウイルス病です）やウナギの病原体研究でいくつか成果が得られました。水族館では葛西臨海水族園との共同研究としてアカシュモクザメの頭部潰瘍病や、新江ノ島水族館との共同研究で、魚類の体表面に寄生するベネデニア（ハダムシとも呼ばれます）の研究に伸展がみられました。河川での魚病研究も、長く進めてきたエドワジエラ・イクタルリ感染症の研究が完了し、次年度より現在もアユに猛威をふるっている細菌性冷水病菌の研究を再開する予定です。

新江ノ島水族館とは、本研究室の卒業生で、現在、国立研究開発法人水産研究・教育機構で研究活動されている倉島氏と、特別展示『究極の片思い 水中の寄生虫たち』に協力しました。本展示には、倉島氏の素晴らしい寄生虫の形態スケッチ、卒業研究

でハダムシの研究に取り組んだ大枝さんの標本や寄生虫診断のプロトコールも展示され、来館者の評判も上々であったようです。また、この企画を進めた一人が、新江ノ島水族館の飼育員で、やはり本研究室出身の鈴木氏であり、卒業生や現役学生らのコラボレーションによりこのような催しが開催されたのは、嬉しい出来事でした。今後も、少しでも卒業生たちの力となり、また卒業生と現役学生達をつなげる仕事をしていくことができると考えています。

来年度は、本研究室に魚類免疫を専門とする新規教員が参画予定であり、新しい研究室の形を模索していく年にもなりそうです。桜水会の皆様には、引き続きご指導ご協力の程どうかよろしくお願い致します。

（間野）



令和2年1月14日～3月1日まで新江ノ島水族館で開催された寄生虫展。



令和2年2月4日（火）卒論発表会終了後の研究室メンバー

原稿の募集

桜水会会報 45 号の原稿を募集します。「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1,000 字程度にまとめ、2020 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

桜水会事務局 宛

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島）

下田臨海実験所

昨年度に変更された学部の附属施設使用規定により、下田臨海実験所を初めとした学部内の各施設は、学部学生および教員の実験・実習および研究以外では使用出来なくなりました。また宿泊に関しても、10日近く前に予約をする必要があることや、5人以上でないと食事が提供されないなど、やや利便性に欠ける使用方法ことになりましたが、本年度も当学科の海洋基礎実習Ⅰを初めとして、小型船舶操縦法実習やダイビングライセンス講習、研究室単位の実験実習、さらには学部のフィールド実習で、多くの学生・教員に利用していただきました。すぎき2世のラインホーラーが8月に故障し、学生実験で行うまぐろ延縄操業や底延縄操業が果たして実施出来るか懸念されましたが、学生達が人力で5kmにも及ぶ幹縄を巻き上げてくれたお蔭で、何事も無かったかのように実習を終えることが出来ました。(ラインホーラーの修理は完了しました)一方、昨年9月と10月に上陸した台風15号および19号がもたらした被害は、記憶に新しいところですが、当実験所も甚大な被害を受けました。実験所から海岸に下るスロープ脇の崖が崩れて大きな石が道路上に散乱した他、階段下の石垣も崩落しました。その他、手漕ぎボートを出すスロープも、コンクリートが捲り上がり、鉄筋が剥き出しになるなど、学生の実験・実習にも支障を来す状況となっており、学部当局に対して、早急な現状復旧をお願いしているところです。以前配備されていた、自動車も現在は廃車となり、

また実験室の軟X線装置も故障するなど、建物、船舶を初めとした各施設の老朽化が進んできていることが実感されます。学部の厳しい財政の下、設備の更新は難しいかもしれませんが、当学科の教育・研究になくってはならない設備ですので、学部執行部に対して今後、息の長い交渉を続けていきたいと考えております。

様々な問題を抱えながらも、本年度もお陰様にて学生・教員が事故に遭うことなく、1年を終えることが出来ました。これからも引き続き、下田臨海実験所を利用する学生および教職員の皆様が、充実した実験・実習を実施できるよう、実験所としても出来る限りの努力を払って参る所存です。

(臨海実験所長 小島 隆人)



着任の挨拶

澤山英太郎 専任講師



海洋生物生理学研究室に着任いたしました澤山英太郎と申します。私は平成 15 年度に本学科同研究室を卒業、東京海洋大学大学院修士課程を経て、民間種苗生産会社で開発研究業務に従事し、昨年度は愛媛大学南予水産研究センターに助教として勤務しておりました。この度、出身研究室において教育研究に携われることを大変嬉しく思います。なお、私の研究分野は水産遺伝育種学となります。昨年度の桜水会報で朝比奈先生が述べられましたように、朝比奈先生のご専門である魚類繁殖生理学とは大きく異なるように見えますが、生命現象を遺伝学的手法により研究していますので、対象を観る目（実験手法）は違いますが目的は類似しているものと解釈しています。とは言え、本研究室が得意とする組織学や内分泌学的実験手法には疎いため、研究の幅を広げるためにも、様々な技術を勉強していきたいと考えています。

これまでの所属では研究中心の業務を担っていましたが、本年度からは教育の比

重も増え、着任早々、遺伝育種学（2 年次前期）と魚類学（1 年次後期）を分担担当することになりました。講義の準備では先生方からアドバイスを頂き、本年度はなんとか乗り切ることができました。また、卒業研究指導では個性豊かな学生達と様々な課題に取り組みました。こちらとしては早く研究を進めたい（結果を見たい）という思いと、学生に自ら考えさせて取り组ませる教育的意義を天秤にかけながら、ヤキモキした気持ちで見守った 1 年間でしたが、皆それぞれ面白い結果を出してくれました。

長年に渡る愛媛県での生活で標準語もすっかり錆びついてしまいましたが、家族共々、藤沢での生活によりやく慣れてきたところです。私生活もより充実させつつ、今後とも教育・研究活動に尽力していく所存であります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします。

着任の挨拶

周防 玲 助手



令和元年 4 月に増殖環境学研究室に着任致しました周防 玲 (すおう れい) と申します。着任前の 3 月に東京大学水圏生物科学専攻にて博士号を取得し、4 月から駆け出しの研究者、教育者としての人生を歩み始めました。専門は海洋天然物化学で、特に海洋生物から医薬品等としての応用が期待される有用な新規化学物質の探索研究に従事して参りました。増殖環境学研究室では、古巣でのテーマに加え、海洋生物や微生物間のコミュニケーションに利用されるような化学物質に着目して、研究を行っていきたいと考えております。

早くも着任してから 1 年が過ぎようとしておりますが、新たな環境下での研究の立ち上げ、学生実験、実習など...想像を超える行事の多さに東奔西走しております。また昨年まで大学院生であったため、研究

一筋で指導経験がないことを不安に感じておりましたが、研究室を主催されている杉田先生・糸井先生をはじめ、学科の先生方、職員ならびに学生の皆さんに大変親切にいただき、充実した活動を送っております。

思い起こせば、初週は昼夜で表情の異なるキャンパス中で迷子になり、彷徨い歩いたこともありました。今ではすっかりこの豊かな緑が広がる環境に慣れ、活き活きと活動する学生の皆さんを見るたびに、元気をもらっています。自身も学生の皆さんに負けぬよう研鑽を積み、精進していきたいと思います。桜水会の皆様とは今後お目にかかる機会が増えると存じますが、その際はどうぞよろしくお願い致します。末筆ではございますが、今後は学科最年少というポジションを生かし、日々アグレッシブに研究・教育活動に邁進する所存ですので、皆様これからご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

辻 雅司講師、水産功績者表彰される

24期卒の辻 雅司氏（現、日刊食糧新聞新社編集顧問・東京海洋大学客員教授）は、この度、令和元年度水産功績者に選出され、11月26日に（一社）大日本水産会から表彰されました。多年に亘り水産業の振興に寄与し、斯業の振興発展に寄与した功績が評価されたものであり、水産人としてはたいへん名誉なことです。同氏のますますの活躍をご祈念申し上げます。

【功績概要】資源培養や稚仔魚保護の人工魚礁の研究に従事し、養殖業の健全な発展に貢献した後、業界誌において取材や報道を通じて、水産業界の国際化を促進するため、海外水産業視察セミナーを数多く企画し、水産業関係者への海外の知識の普及とグローバル化を推進した。

さらに、学術・教育分野においては執筆活動等を通じて我が国漁船漁業の構造改革の必要性や水産食品におけるイノベーションとマーケティング、魚食普及の必要性を啓蒙した。

（文責：杉田）

近況報告（昨年度未掲載）

事務局のミスにより、昨年度いただいたコメントの一部に掲載漏れがありました。大変申し訳ございません。

【第12期】

○吉田 浩哉

市内35校の小学生に体力測定8種目を測定しに毎週学校に行っています。

【第14期】

○長田 光司

6月2日（土）14期卒業生と東府中にて情報交換会と名をかり、飲み会をします。毎年恒例で楽しみにしています。

【第15期】

○添田 一萬

今、現在病院にて設備管理の仕事をしており、相変わらずジョギングをしています。

【第18期】

○原 博隆

今年に入り初入院体験。しかも難病指定。治りにくいのですが、治療を受けていれば自立生活できるのが救いです。友人をみると皆、何等かの入院経験者ばかり。学校を訪れると知った先生方は亡くなられ、歲月人を待たずを実感しています。

【第19期】

○加部 郁夫（故）

桜水会事務局の先生方には、ほんとうに御苦労をおかけします。これからも宜しく願います。同期（19期）に会うことができず残念です。私は月一度温泉旅行を楽しんでいます。伊豆の温泉ですが。

【第22期】

○泰道 博

TK1-544 これは日本大学号の登録番号です。夢と希望だけが詰まった青春の船でした。話ができれば幸いです。22期生は70歳の声が近くなりました。武井、蛭田、馬島、村田君再会したいです。

近況報告（本年度）

【第1期】

○杉浦 宏

どうにか生きております。数えて90歳9月が来ると89歳。同期生も少なくなりました。お集りの皆様によろしく。

【第2期】

○井上 章二

現在89歳で、現役町議、社労士事務所を継続中です。希望が有るところに、人生もある。希望が新しい勇気をもたらし、強い気持ちにしてくれます。力強く、今を精一杯生きたいと願っています。皆様も、元気で今を無心で生きましょう。

○大谷木 緑四郎

今秋10月の誕生日に、元気で90歳を迎えます。諸先輩方皆様のご支援に感謝しております。

【第3期】

○岡庭 邦夫

当日他の行事と重なり出席できません。ご出席の皆様によろしく申して下さい。総会懇親会のご盛会を祈願致します。

○加藤 鉦三

返事が遅くなりすみません。元気にはして居りますが、もう一人で東京まではいきません。会報で知っている人の名前を見て大変なつかしく思っています。まぼりで合宿した時の事はなつかしいです。皆様によろしくつたえて下さい。

【第4期】

○國守 俊策

桜水会の運営に係わる皆さんの努力で今まで続けていますが、ご苦労を思うとやむなしかとも思う。一枚の用紙でも続けられるなら希望します。残念だな！！

○久米 穂積

昨年10月18日、地元の香川大学農学部学生31人に“若き日の南氷洋捕鯨”の小さな本の話をして学生に聞かせてやって欲しいとの事で結果が良かったので第2回をやる事になり今年は5月22日にやります。年老いて大学生に講義できるのは86歳にして光栄と思ひ頑張ります。

【第5期】

○浜高 善祐

4期5期の皆さん、桜鱗会を開きませんか。音頭を取る人がいなくなったようですね。私は元気で頑張っています。

【第6期】

○沢井 良之

毎年お知らせ有がとうございました。皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

【第7期】

○大西 慶一

今のところ元気です。高齢のため遠出を控えております。会報は楽しみにしています。後輩の皆さんの研究熱心ぶりが頼もしいです。頑張ってください。

○川崎 義一

いつも欠席ばかりで申しわけありません。元気で暮らしています。

○関 洋介

桜水会会報拝読致しました。役員の皆様ご苦労様です。体調上出席できません。総会並びに桜水会のご発展を祈念申し上げます。

【第8期】

○上野 智章

84歳になりました。元気で毎日生活し

ています。

○久住 喜久子

毎度通知ありがとうございます。今回は検査入院がありますので欠席させていただきます。

○藤原 貞夫

一度行きたいと思いますが、83歳となり、好きな釣船もなくなり毎日下手な墨絵を描くくらいで、人間80歳を過ぎると死と同じです。

【第10期】

○櫻木 進

82歳：元気で世のため、人のため地域活動を行っております。

【第11期】

○友行 一紀

2018年7月の集中豪雨で郷里の三原の実家が全壊並み被災も、多くの方々のご助力のお陰で4月無事リニューアル完了、居場所ができました。ミニクラス会を再開したいと思っています。（6月下旬を！）

○松岡 玳良

なんとか元気です。

【第12期】

○吉田 浩哉

ゴルフ（年5～6回）、グランドゴルフ

(月 10～15 回)、ボーリング (週 2 回)、
元気そのものです。12 期、年齢にマケル
ナ！！ガンバロー。

【第 13 期】

○周 耀休

目下 86 歳の高齢を迎えました。お陰様
で又元気にて頑張っています。みな様も同
じく元気で頑張ってください。

○横地 龍男

今回日程がどうしてもとれません。盛会
を祈ってます。

【第 15 期】

○小川 起玄

ご案内をありがとうございます。76 歳
となりました。会報をお願い致します。

○平岩 良允

残会、次回は宜しく。

○宮 忠義

関係者の皆様方いつも御苦勞様です。世
界の情勢は刻々と変化しており令和の時
代も波乱万丈かと思われます。小生も生涯
現役と思っていましたが精神的面、肉体的
面にもおとろえを感じて来ましたがroman
とソロバンを求めて日々頑張ってい
きたいと思ひます。

【第 16 期】

○牛島 博之

まだまだ元気で桜水会に出れるうれし

さ、がんばるぞ。

○山本 武人

会報 43 号で塚本教授の退任を知り残念
に思いました。彼が東大修士の頃にアユの
研究で淡水研に通われてた頃知り合
いました。その後ウナギ博士として活躍され
日大に来られたことを知り喜んだもんで
す。

【第 17 期】

○坂下 建次

1964 年東京オリンピック最終日の午後、
教授の計らいで休講となり、青梅街道でマ
ラソンの円谷選手に声援を送った。2020
東京大会はもうすぐだが離島佐渡で喜寿
を迎えた私には無理かな。

【第 18 期】

○原 博隆

カッター部学生のお守りをしています。

【第 19 期】

○加部 郁夫 (故)

毎週抗癌剤治療をしてがんばっており
ます。浅草花川戸にて履物問屋をあいま
かわらず商っております。浅草におこしの節
は是非におたちより下さい。又皆様のご多
幸を折念しております。

○田崎 春生

「湘南会」を同期の吉川、安達、見谷と
毎年下田の須崎で行っています。

○松井 正之

元気にまだ現役で頑張っています。漁業時に日大号乗船の方連絡お待ちしております。一度お会いしたいものです。

【第20期】

○土肥 正晴

私が在職中芸術学部から譲渡された下田臨海実験所のマイクロバスの廃車、高城さんの転勤など変化しているのだと当時を思いだしております。元気です。

○本間 英一

石巻市南浜町地区では2021年に南浜津波復興祈念公園が完成します。門脇地区も商店がなくなってしまったのでミニスーパーを開いてがんばっています。

【第21期】

○広瀬 幸一

業界（社会保険労務士桜門会）の総会が同日に開催され、桜水会は今回は欠席となります。

○山本 忠

冷凍運搬船のオーナー会社：共栄海運（株）に在職中。28期（遠洋漁業コース9期）の五十嵐君も同じ会社にいます。

【第22期】

○泰道 博

はや古希です。思えば二度とない晴海埠頭での日大号出港のスタンバイ。心に残る

京王プラザホテルでの桜水会総会。プリンスホテルでの添田先生の退職祝は圧巻でした。誠之助先輩やサンコンさん（ウィッキーさん？）にも会えました（感謝）。

○森 義信

退職後8年間勤めた日本定置漁業協会を7月（19年）に退任します。今後、当該漁業に従事されている方、沿岸海洋生態系に関心ある方などとの関係ができれば幸いに思います。当方、080（3427）1348、moriyoshi1101@t.vodafone.ne.jp

【第23期】

○高橋 雄三郎

オンライン化について、時代の流れもあり賛意致します。事務局の皆様ご苦勞様です。メルアド登録の予定です。

【第24期】

○猪狩 保

昨年より母校のイメージが悪くなっています。大学関係者には毅然とした対応をお願いいたします。

○小野 龍一

6月15日は母校新潟県立海洋高校創立120周年記念式典に出席の為、欠席させていただきます。

○安武 正滋

横浜市鶴見区で土地・建物の登記の仕事をしており、法務局（登記所）とやりとりする日々を過ごしています。

【第 25 期】

○大野 誠

平成 31 年 3 月でケンコーマヨネーズ(株)を、65 才をもって退職いたしました(定年)。これから第 2 の人生を楽しみます。まだ元気です。夫婦で旅行を楽しんでいます。

【第 26 期】

○大野 賢司

魚拓暦まもなく 50 年。プロの魚拓家(雅名龍太郎)として活動中です。2001 年より釣り具の総合メーカーであるダイワの魚拓カレンダー制作を担当しています。また「大野龍太郎の魚拓美—色彩美術画集」を出版しました。

○高橋 昇

2018 年 10 月 26 期と 25 期 24 名小岩にて集まり楽しく 2 時間を過ごしました。漁機遠漁漁業に関係なく水産学科卒業として集まっています。名簿にもれて連絡できない人はどうぞ私まで TEL 下さい。03(3622)8796 タカプラ SCJ 高橋です。

○福村 誠

まだ現役、日進畜産工業で頑張っております。

【第 27 期】

○糸久 喜美夫

再任用教員として仕事ができるのも 2020 年度が最後です。

○本郷 久

自営の為未だ現役！！事務局の皆様長い間ありがとうございました。私、これからも日大 OB としてプライドを持って生きてまいります。同期の皆様の健康を祈っております。

【第 28 期】

○店網 秀男

定年退職で時間に余裕のできた皆さん、是非桜水会総会でお会いしましょう。

○津崎 順

2019 年度も「アクアマリンふくしま」に再任用されています。近くの海岸林および鎮守の森で 5 年前に採取した樹木の種子を発芽・育成し、水族館周囲に植樹して「港オアシス」を造成しています。水族の飼育・展示業務は若い人材に任せることにしました。

【第 29 期】

○成瀬 晃

年金生活に入りましたが、まだまだ現役で働いています。日大のイメージアップの為に共に頑張りましょう。御盛会をお祈り致します。

【第 30 期】

○海沼 勝裕

元気にしています。

【第 32 期】

○井上 博

横須賀市浦賀 5-8-5 ポートアベニュー浦賀に異動になりマンション管理員として相変わらずの毎日です。5 月中旬より 10 日間ドイツへ旅行に出掛けます。世界を旅するのが趣味です。

【第 35 期】

○大内 雅功

健康経営のコンサルタントとして独立しました。また、「茨城県よろず支援拠点」のコーディネーターとして、中小企業の支援をしております。ここ一年で 15kg ダイエットしましたが、まだ太めです。

【第 39 期】

○小林 創

調査航海で乗船中のため欠席いたします。

○山本 研

海洋から宇宙まで様々な分野仕事をして視野が広がりましたが、視力は落ちてきています。(笑)

【第 46 期】

○岡本 大志

3 月中旬よりひと月半、妻子を残し単身で北米へ出張でした。帰宅したら家の中は大荒れ...大人一人で二人のチビの世話をしながら仕事を続けるのは大変だったと思います。そんなわけで今は休日には家の掃除に力を入れています。落ち着くまでは

もう少しかかりそうです。

【第 48 期】

○飯田 正彦

申し訳ございません。仕事の都合で東京におりませんので欠席させていただきます。(母親)

【第 61 期】

○真田 晴香

釣舟屋にて船乗り見習いのアルバイトと釣具屋のパート、主婦に加えて実家の手伝いをしております。貧乏暇なしとはまさにこのこと！それでも楽しく前進あるのみです！

【第 65 期】

○泉 宏明

昨年、間野先生にお会いして、いろいろ相談にのっていただき嬉しかったです。先生、ありがとうございました。

会計報告

平成30年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 小糸 智子

平成30年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,769,000	1,758,000	
繰越金	917,388	917,388	
会報発送補助	200,000	200,000	学部校友会より
雑収入	0	50,000	同窓会祝儀50,000円
利息	1,000	960	
その他	700,000	800,000	終身会費積立金一部取り崩し
合計	3,587,388	3,726,348	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
通信連絡費	780,000	775,334	
会報・総会案内発送	750,000	739,287	
通信費	30,000	36,047	
事業費	2,490,000	1,952,518	
会報発行	260,000	257,580	
準会員対策費	650,000	641,915	運動会Tシャツ、基礎実習I補助ほか
卒業記念品	180,000	163,080	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	500,000	483,877	
名簿管理費	150,000	149,535	業者委託
学科パンフレット作成補助費	200,000	0	
学会参加費補助(学生)	300,000	104,293	10件
講演料	200,000	136,774	5名分(概論、桜水会総会、交通費含む)
その他	50,000	15,464	振込手数料、謝礼、祝儀
事務局費	275,000	222,131	
会議費	100,000	100,429	
会議時交通費補助	25,000	21,000	
消耗品費	30,000	702	
アルバイト費	100,000	68,000	
その他	20,000	32,000	
慶弔費	30,000	31,600	
予備費	12,388	0	
繰越金	0	744,765	
合計	3,587,388	3,726,348	

終身会費積立金

平成29年度まで	22,373,590	
平成30年度	-800,000	積立金一部取崩(-80万円)
合計	21,573,590	三井住友銀行、かながわ信用金庫

会員名簿発行積立金

平成29年度まで	1,233,381	
平成30年度収入	105	利息105円
合計	1,233,486	横浜銀行定期

以上の通り、報告いたします。 平成31年4月1日 会計担当 小糸智子

会計の収支決算は関係諸帳簿および証書類と照合の結果、正確であることを認めます。
令和元年 6月 4日 監事

同

事務局便り

○ “世の中はいつも 変わっている から 頑固者だけが 悲しい思いをする 変わらないものを 何かにととえてその度崩れちゃ そいつのせいにする シュプレヒコールの波 通り過ぎてゆく 変わらない夢を 流れに求めて” 10代の終わりに私がよく聞いていた中島みゆきの世情である。

私が桜水会の事務局長をやって3年が過ぎた。この間、日大も日本も、とんでも無く変化している。しかし、それは有る日突然に前触れなく顕在化してきた。今までも先人たちは日本を変えてきた。我々日本人がより幸せな生活を送れることを信じて。でも、最近日本では種子法廃止と農薬（グリホサート）使用の緩和、水道民営化、移民法など、我々の生活の基盤が大きく狂う様な社会システムの変更が起きている。進化生物学の世界も動的平衡という言葉がある。生物は代謝や様々なシステムを変えながら、今までと同じ様に生存を図る。そろそろ、我々も何のための、誰のための動的平衡なのかを考える時が来ているのではないだろうか。しかし、この多難な時代にこの学び舎を148名が去る。彼らが頑固者だけが悲しい思いをする世の中を変えてくれることを切に祈る。

さて、私の後任として廣海十郎先生が事務局長になる。廣海先生もまた、桜水会を変えてくれることと思う。皆様この3年間本当に有り難うございました。末筆ながら、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

○令和元年度の卒業生（第69期）は148名となりました。卒業生各位のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。これに加えて、正会員の総数は9403名となります。

○桜水会会員各位の住所、勤務先、電話番号などに変更がありましたら、個人情報保護の観点から、桜水会ホームページの「名簿修正依頼」上で直接修正していただくか、<http://cgi.solution1.jp/osuikai/meibo.php>

（Yahooで検索：日大桜水会 → 名簿修正依頼）もしくは郵送にてご連絡ください。なお、平成22年4月1日より、日本大学生物資源科学部の郵便番号が「252-0880」に変更となっております。ご注意ください。

（事務局長 森 司）

住所変更手続きについて

平成22年3月1日より、桜水会ホームページ上から名簿（住所・勤務先等）変更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>

編集後記

○桜水会会報本号では、「職場便り」（4件）、「研究室便り」（8件）、「海洋生物資源科学概論の講義内容を紹介」（5件）、「着任のご挨拶」（2件）および会員の「近況報告」を掲載しました。

○桜水会のホームページ（HP）を立ち上げ、学科HPにリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報24号（平成11年度）以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますので是非ご覧ください。学科ホームページのアドレス <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>です。

○同窓会を企画されている幹事の皆様へ

個人情報保護の観点から名簿の提供は困難な状況です。対応策としまして、総会案内送付時に、幹事の方が作成された同窓会開催案内を同封する形をとらせて頂いたこともありました。必要に応じて、下記にご相談ください。

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（編集担当 福島 英登）



日本大学桜水会会報 44 号

令和 2 年 3 月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

電話 0466 (84) 3680

E-mail:mori.tsukasa@nihon-u.ac.jp